

## ■ 目先は米追加経済対策を巡る協議の行方次第

「猫がレーザーポインターを追いかける様によく似ている」とは、英住宅金融会社ネーションワイドの投資リサーチ責任者の弁。確かに、目下の米追加経済対策を巡る協議に対する市場の反応は、それぞれ“猫の目”のようにクルクル変わる。

結果、米株価は「迷走」と呼ぶにふさわしい動きとなっているが、いずれ大型の景気対策案が合意に至るとの期待は根強くあり、基本的にはリスク選好ムードが継続している。そこで、リスクオンのドル売りが強まりやすくなるというわけだが、それにしても足下のドルは弱い。

一つには、対ドルでの人民元高が止まらないという状況がある。目下のドル／人民元は6.7元をも下回るところまで下げており、これは2018年7月以来の低水準である。世界で最も早くコロナ禍から脱し、順調に景気が回復している実情を考えれば当然の帰結ということになるのかも知れないが、その背後にはドル離れを進めておきたい中国当局側の意向もあるとされる。どのみち、今後もドル／人民元の動きからは目が離せない。

また、対ドルでユーロやポンドがやけに強い。むろん、英国と欧州連合（EU）の通商交渉の行方について基本的に市場が楽観しているという部分はある。いまだ瀬戸際でのせめぎ合いは続いているが、それはあくまで技術的なもので最終的には適当な落とし処に落ち着くと読みである。よって、その「期限」が迫るほど期待が高まったりもする。

一方では、ポンドが出直り基調にあることをユーロ／ドルの強気材料と見做す部分もある。確かに、英国とEUの通商交渉が合意に至れば、それはユーロ圏経済にとってもプラスということにはなる。

とはいえ、ファンダメンタルズ的に見るとユーロに関しては強気材料よりも弱気材料の方を見つける方がずっと簡単である。欧州でのコロナ感染第2波は第1波よりもずっと強烈で、ここに来て外出禁止などの厳しい行動規制を課す都市が日に日に増えている。その経済的ダメージは後に必ず数値となって現れるだろう。また、欧州中央銀行が12月の定例理事会で追加緩和に踏み切るとの見方もますます強まってきている。「それまでには、まだかなりの時間がある」ということが、目下のユーロの下値を支えているのだろうか。

他方、トルコリラの下げに歯止めがかからず、それが欧州不安につながる可能性というのも大いに危惧される。トルコのエルドアン政権が支援するアゼルバイジャンとアルメニアの民族紛争が再燃しており、問題が長期化すればトルコと欧米との関係は悪化する。問題は、トルコの外貨準備が足下で387億ドルと昨年末から半減し、債務危機への懸念が高まっていること。トルコの短期の対外債務は約1700億ドルに積み上がっていると見られ、万一、債務危機に陥れば債権を抱えるスペインやフランスに甚大なダメージが及ぶ。

いずれにしても、目先はユーロ／ドルが一目均衡表の日足「雲」上限をクリアに上抜けるかどうかが一つの焦点ということになる。上抜けると日足の運行線も日々線をクリアに上抜けることとなり、あらためて1.1900ドル台を試す可能性が高くなる。逆に、再び日足「雲」のなかに押し戻される動きとなれば、1.1800ドル割れから1.1700ドル処を目安に一旦ショートを試してみるのも一手と思われる。

なお、昨日はドル／円が棒下げの展開となり、105円処を下抜けても下げ止まる気配がなかなか感じられなかった。上値の重い状態が続いたことでロング勢が見切り売りを出した結果、今日2日安値をも下抜けたことで、断続的にストップロスが誘発されたということもあろう。

欧米に比べてコロナ感染の程度が抑えられているということもあろうが、さすがに104円処では底堅さを維持すると見る。むろん、仮に9月21日安値＝104.00円を下抜けるような展開となれば、そこから103円あたりまでの一段下げは十分にあり得るものとおかねばなるまい。もちろん、経済対策が合意に至れば一旦はドルを買い戻す動きが急になる可能性もあると見られる。

(10月22日 09:50)